

そだちのねっこ

～乳幼児期の遊びより～



教育センター所報
11月号掲載

「せんせい見て！チョウチョ、つまかえた！（つかまえた）」 ～大人が安心の基地としてあり続けるわけ②～

10月18日（金）、2歳児の子どもたちが遊ぶ様子を見学してきました。

手に虫取り網と虫かごをもち、背中にはバッタの羽をつけていたり、4歳児の真似をして、帽子を反対向きに被り忍者になりきっていたりする子どもたちが、元氣よく園庭に出てきて、「今日も虫つかまえるねん！」「せんせい、ちゅうがっこういこう！」と自分がしたいことを口々に伝える姿がありました。

扉1枚で隣接する中学校のグラウンドに行くことができる環境を活かし、よく虫探しに行っているということでした。

「チョウチョおるかな～？」「どこにおる？」など、保育者や近くにいる友だちに言いながら、一生懸命探していました。空中に動いている小さなものを探すがまだ難しい子どももいる中、保育者も一緒に探し、「きたきた！」と指を差し伝えていました。「あっ、チョウチョ見つけた！」との声と同時に網を振り回して捕まえようとしたり、「あかんで！みんなのチョウチョやで」と自分が捕まえたい一心での発言をしたりするなど、一人ひとりの楽しみ方で虫探しをしていました。

また、保育者が捕まえた『バッタ』や『カマキリ』を虫かごに入れてもらおうと、じーっと観察しているかと思うと、飛行機の音に反応して「あっ、ひこうきや！」と飛行機に手を振ったかと思うと、「あっちになんかおるかな？」と走り出したり「せんせい！」と先生を見つけてにっこりと笑いながら手を振ったり…と、目や耳からの情報によって、興味があちこちに向き、行動したり言語化したりする2歳児らしい姿が、とてもかわいらしく、印象的でした。



草むらで虫を探していたA児が「せんせい見て！チョウチョ、つまかえた！」と網に『シジミチョウ』が入ったことに驚きと興奮しながら何回も伝えていました。A児の様子を見た保育者は、自分で捕まえた経験がとても嬉しかったことを感じ、「すごいね！Aくん自分で捕まえられたんやね」と興奮と嬉しさを丸ごと受けとめていました。A児はその後も、『シジミチョウ捕り』にはまり、2回ほど成功していました。虫かごに入れるときに逃げてしまうこともありましたが、保育室に入る前には「虫、逃がしてあげる」と虫かごを開けてもらっていました。そんな中、自分の目の前から飛んでいかないカマキリに「なんでいなくならないの？」としばらく見ていました。A児が羽根を触って広げようとしたので、「今は飛びたくないのかもね」と、保育者がそっと手にのせて草の中へ放しました。目の前からいなくなった事実によりA児は納得し、保育室へ戻っていきました。この日のA児は自分でできたことを自信にして、「もう一回！」という意欲と『網で虫を捕まえる楽しさ』を味わったんだと思いました。



保育室では、子どもの手で扱いやすい手作りの虫カードが3セットあり、捕まえた虫をカードと見比べる子どももいました。きっと、「かして！」「いや！」などのトラブルも繰り返しながら、一人ひとりの満足が満たされるような数々が用意されていることにも、保育者の細やかな配慮を感じることができました。

前号の『そだちのねっこ』にて、『安心基地（保育者）』がいるという安心を感じることで、自分から『外の世界』へ行こうとする気持ちが芽生えます。【『安心基地と外

の世界』を行ったり来たり繰り返すこと＝『安心感の輪』こそが、生涯発達の土台となります。また、『外の世界』では、発達年齢に合った、心をくすぐる環境や玩具の準備、保育者のかかわりや声かけが大事になることをお伝えいたしました。



この虫探しのエピソードからも、安心感の輪を回りながら、自己肯定感を育み、やりたいことを尊重されることで、自分の力を広げていることがわかりました。保育者は、子どもが集中しているときはそっと見守り、「見て!やって!」の要求にタイミングよくかわり、外遊びと室内遊びや生活などがリンクでき、且つ2歳児に扱いやすい環境（教材・素材・道具・空間など）を整えることが求められます。そして、危険がない限り、「自分でやりたい!」を安心して実現できる温かなまなざしとエールを伝えることも忘れてはいけません。そうした保育者の役割によって子どもたちの『安心感の輪』が保持できることで、いろいろな経験に対する興味や意欲となります。その心の育ちこそが、非認知能力につながるとも言えます。

今回のエピソードを、【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】に関連させてみると、『健康な心と体』『自立心』『自然との関わり・生命尊重』につながる芽生えがありました。

おまけ

【『そだちのねっこ』(その後、エピソード)】

入園したときは、不安いっぱいずっと先生のシャツの裾をもってひっついていてNがもう中学生になりました。園のときに先生に丁寧に寄り添ってもらいながらも、Nの興味をそそる遊びや「やりたい」を実現でき、思う存分経験させてもらったことで、卒園時には、めちゃくちゃよくしゃべり、自分からやってみる姿に変わったことを我が子ながら驚きました。

小学校入学時は、字も書けなかったですが、全然そんなことは問題ではなかったです。中学生になった今、いろいろなことに意欲や好奇心、協調性などを保ち、自ら生徒会へ立候補し、一員として張り切って取り組んでいます。「あの子が生徒会ですよ!」「N は園で遊びから多くのことを学び、今のNの姿になったと思っています」と笑いながら、とっても嬉しそうにNの保護者から話をきかせてもらいました。

このような保護者からの話と姿から、就学前での『そだちのねっこ』から、切れることなく芽を出しスクスクと育ちや学びがつながり、活着していると知れました。幼児教育で大事にしている、『遊び』を通した学び(＝非認知能力)が、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な役割であることを改めて実感しました。

<7年前に卒園し、現在中学生になったNの保護者の声より…>